國學院大學学術情報リポジトリ

古代ギリシア医学における身体・環境・宇宙：哲学的方法との関連から見たヒッポクラテスのHolism

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木原, 志乃, Kihara, Shino メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000769

古代ギリシア医学における身体・環境・宇宙

—哲学的方法との関連から見たヒッポクラテスのHolism(1)

木原志乃

はじめに

近年のヒッポクラテス研究において注目されている言葉の一つが、Holism（全体論）である(2)。H. Kingは、「ヒッポクラテスは死せず。いろいろな意味で、かつて以上に生きている」と述べ(3)、その主張の中心に、古代から現代医学まで続くホリスティックな癒しの実践を置いている(4)。さらに2017年に開催されたICSのConferenceは‘Ancient Holisms’をテーマとし、これに基づいて2020年にC. Thumigerを編者とする著書（*Holism in Ancient Medicine and Its Reception,* Brill）において、古代の医学文献にみられるHolismの歴史的意義に様々な角度から光が当てられた。本稿では、このような研究動向を踏まえ、ヒッポクラテス医学におけるHolismの問題を検討する。

そもそもHolismはτὸ ὅλον（全体）というギリシア語に由来し、全体主義（totality）とは区別された仕方で、部分に対する全体の総合的、包括的、全関連的、全人的視点が重視される言葉である。J. Ch. Smuts（1870-1950）によって用いられて以来(5)、生命医学の有機体論をはじめ社会科学や心理学など、多様な仕方で適用されて語られてきた(6)。W. V. O. Quineらの哲学用語としても知られるが(7)、特殊な専門用語としての適用は別として、一般にHolismとは部分と全体の関係を説明する際の独自の立場であり、そこにおいては全体は部分に還元不可能なものとして捉えられる。すなわち、部分の寄せ集めではなく部分の総和以上の「全体」の理解が要となっており、これは我々の知るヒッポクラテス医学の重要な一側面であると言えよう。というのも、彼らの医学説においては身体を還元主義的に捉えるのではなく、自然全体に目を向けて病について語られているからである。だが、Thumigerが指摘するように、このようなHolism概念は多層的であり、個別の

医学文書にそれらがどのように示されているかについて、また当時の哲学的方法論とそれらがどのような関係であったかは、具体的に検証する必要があるだろう。

そこで本稿では、まずヒッポクラテスについてのプラトンによる言及を取り上げ、哲学側からの医学のτὸ ὅλον理解をめぐる伝統的な議論の枠組みを確認するところから出発したい。その上で、ヒッポクラテス文書におけるHolismとして、身体と自然環境および宇宙万有との関係について検討し、その独自性を明らかにすることを目指す。

第一章：プラトン『パイドロス』におけるヒッポクラテスのHolism

ヒッポクラテスについて、その名を挙げながらτὸ ὅλον（全体）という言葉と結び付けて説明した最初のテキストはプラトンの『パイドロス』である。プラトンの著作の中でも、初期対話篇あるいは中期への移行著作である『プロタゴラス』はヒッポクラテスについての最古の証言とされ(8)、技術の真実性についての問題提起の場面で医術が導入されている。そして、後期に近い中期対話篇『パイドロス』では、よい言論のために総合と分割（διαιρέσεις καὶ συναγωγαί）の方法としての哲学的問答法（διαλεκτική）が会得できていなければいけないとされ（266B）、弁論術の真なるあり方について語り進められる。そこにおいて『プロタゴラス』や『ゴルギアス』等と同様、真なる技術に値する言論の方法論がヒッポクラテスの医術と対比されているのである。

プラトン『パイドロス』270C1ff.

> ソクラテス「ところで、魂の本性（ψυχῆς φύσιν）を理解するのに、全体の本性を離れて（ἄνευ τῆς τοῦ ὅλου φύσεως）満足に理解すること（ἀξίως λόγου κατανοῆσαι）が出来ると思うかね。」パイドロス「いやしくもアスクレピオス派の医学者、ヒッポクラテスの言葉を多少なりとも信じなければならないとすれば、身体についても、あなたが言われた方法をとらないと、その本性を理解するのは不可能だとのことです。」ソクラテス「そうだとも、君、ヒッポクラテスの言うことは正しい（καλῶς γάρ, ὦ ἑταῖρε, λέγει）。…」(9)

プラトンはヒッポクラテスの方法論に関して、「全体の本性（τῆς τοῦ ὅλου φύσεως）」（270C1-2）を理解すべきとしている点で正しいとしている。この箇所は、ヒッポクラテス自身が語ったことについての最初期の証言として注目され、古くから大きな関心が寄せられてきた。また、プラトンが言及したこの方法論は現存するヒッポクラテス文書のどこに示されているのかという問題もこれまでに様々な議論が繰り返され、ヒッポクラテス自身による著作を見定めるための、いわゆる'Hippocrates Question'(10)に通じるとされてきた。ヒッポクラテス全集の編纂者E. Littréは『古い医術について』が真作にあたるとして、全集の冒頭においたこともよく知られている。ここで従来の解釈者たちのこれまでの議論を詳細に辿るこ

とはできないが、以下の２点について、いくつかの立場を概観しながら問題を整理しておきたい。すなわち、（１）プラトンはどのような意味でヒッポクラテスのὅλονを捉え、身体と比べて宇宙や環境という視点をそこにおいてどの程度重視したか、そして、（２）このプラトンの理解を我々は現存するヒッポクラテス文書とどのように関連づけるべきか、である。

まず（１）に関して、すでに古代の注釈者たちがこの問題に言及しており、２世紀のガレノスはヒッポクラテス文書『人間の自然本性について』の注釈において、ὅλονを四要素に基づいた人間の自然本性論と関連づけ、ヒッポクラテスが重視したのは「万有」「宇宙」（τὸ πᾶν, τὰ πάντα［ὁ κόσμος］）のことであるとした(11)。一方で４世紀の新プラトン主義者ヘルメイアスは、プラトン『パイドロス』注釈において「身体σῶμα」全体のことが言われていると解釈している(12)。それ以後の多くの研究者たちは、「身体」と「宇宙」というこの二つの解釈のいずれかに与してきた（the whole body［Edelstein Rey；Steckerl；Kranz；de Vries, Jouanna, etc.］／the universe, whole world［Galenus；Littré；Fredrich；Gomperz；Pohlenz；Capelle；Palm；Deichgraeber；Heidel；Festugiere；Diller；Nestle；Jowett；Joly；Mansfeld；Nehamas&Woodruff, etc.］）(13)。プラトン自身の哲学的方法論の説明に即して文脈を理解するならば、以下に語られている通り、ὅλονの本性を知るのに、まず技術の対象とするものが単一か多種類かを調べるべきとされる。

プラトン『パイドロス』270C9ff.

> それでは、この本性の問題について、ヒッポクラテスと正しい道理とがどのようなことを述べるか、調べてみたまえ（τὸ τοίνυν περὶ φύσεως σκόπει τί ποτε λέγει Ἱπποκράτης τε καὶ ὁ ἀληθὴς λόγος）。そもそも、どのようなものにせよ、あるものの本性について考察するには、次のようなやり方によるべきではなかろうか。まず第一に、ぼくたちがあるものに関して、自分でも技術を身に付け、また他人を技術家にしたてるだけの能力を持ちたいと望むなら、技術を向けるべきその対象が、単一なものか、それとも多種類のものかを調べること（ἁπλοῦν ἢ πολυειδές）…

この説明からは、おそらく対象である魂の全体を吟味することが想定されていることになる。それは多種類あるものであり、個別の魂全体というより多くの種類の魂全体であり、そして以下の通り、真なる技術においてはその作用についても見極める必要がある。

プラトン『パイドロス』270D3ff.

> 次に、もしその対象が単一のものなら、そのものが持っている機能（δύναμις）を調べてみること。すなわちそれは本来、能動的には何に対してどのような作用を与え、受動的には何からどのような作用を受け取るような性質のものであるのかを調べるのである（τίνα πρὸς τί πέφυκεν εἰς τὸ δρᾶν ἔχον ἢ τίνα εἰς τὸ παθεῖν ὑπὸ τοῦ）。またもし、その対象が多種類のものならば、

その種類を数え上げ、しかるのち、その一つ一つの種類について、単一な種類の場合にやったのと同じことを、つまりそれが本来何によってどのような作用を与え、あるいは何からどのような作用を受けるような性質のものかを（τῷ τί ποιεῖν αὐτὸ πέφυκεν ἢ τῷ τί παθεῖν ὑπὸ τοῦ）、みなければならない。

このような箇所を見る限り、この箇所でプラトンが魂の全体＝複数の魂を取りまとめて魂の全体のことを意図して語っていたことは明らかである(14)。他方で、τὸ ὅλονを宇宙全体であると見做すべき根拠は、先行するアナクサゴラスの記述との結びつきである（プラトン『パイドロス』270A1ff.）。プラトンは著名な政治家ペリクレスを例に挙げて、哲学的問答法の心得を備えていた場合のことを語っている。そしてペリクレスがその能力を持っていたのは、彼がその精神を持ち合わせたアナクサゴラスに出会ったからだとされる。アナクサゴラスの知性は言論の技術にふさわしいものであり、ここでの「空論にちかいまでの詳細な議論と、現実遊離と言われるくらいの高遠な思索」には大衆が哲学者を正しく理解しないことへの批判的なニュアンスが込められている。理想的な弁論家として、ペリクレスとともにアナクサゴラスもその知を備えているとすることからすれば初期ギリシア自然哲学からの流れを受けた「宇宙」のことをプラトンが暗に示していたとも考えられる(15)。そして何より当時のギリシア語τὸ ὅλονは、一般的に自然万有を意味するもの、そして宇宙とその総体を指すものとして用いられている多くの用例を確認できよう（Cf.ピロラオスB1「宇宙全体の自然は無限なるものと限定するものの調和から成り立っており、宇宙の全体も、その中にある全てのものもそうである（ὅλος ὁ κόσμος καὶ τὰ ἐν αὐτῶι πάντα）」）。

さらに、「魂」と「宇宙」の双方の意味を考慮しつつ総合的に読もうとする立場もある。まず文脈の意味に即した理解では魂全体であろうが、初期自然哲学者やヒッポクラテス的な理解を何らか前提にして、宇宙全体という意味もそこに重ねて念頭においていたと解する立場である。Smithはプラトンは文脈において曖昧な言語使用をしていると解し、ὅλονは、人間全体でもあり、宇宙全体でもあり、あらゆる身体でもあると主張した。また、プラトンのヒッポクラテス理解において、宇宙全体と身体全体といった解釈は、相互に矛盾するものではないと主張したのがJolyである。さらにそれら二つの解釈から派生して、気象論的な観点を組み込んで、ὅλονについて「環境」「システム全体」という解釈も提示されてきた(16)。プラトンの文脈には「環境」は直接当てはまらないとしても、ヒッポクラテス医学においては、「環境」は、身体と宇宙をつなぐ適切な意味合いとなっている。すなわち身体の本性を理解するには、身体やその器官のみに注視するのでなく、気候、季節などの環境的要因をも考慮し、マクロコスモスのあり方も含め全てを踏まえていなければならないからである(17)。

第二章　『カルミデス』と『パイドロス』の医術観

では、このような総合的な含意を持たせた解釈はプラトンのテキストの読解として妥当であろうか。Tsekourakisは先の二つの主要な候補のどちらかであると考えるのは説得的でないとし、またプラトンの文脈でのὅλονの意味をヒッポクラテス医学へ適用することは議論を誤った方向に進ませているとした。弁論術と医術を比較させ、方法について探究しているが、プラトンの方法論と（プラトンが捉えた）医術の方法論とは異なっており、全体と部分の関係について必ずしも一致させる必要はないというのである[18]。そしてプラトンのヒッポクラテス理解としては、『カルミデス』の証言に基づき、基本的に身体全体のみと解釈すべきと主張されている。

プラトン『カルミデス』156B2ff.

それは頭を健康にする薬としての効能しかないようなものではないかね。いやおそらく君もこれまでに、優れた医者たちから聞いたことがあるだろうが、いい医者なら、眼病を見てもらいにやってきた患者には、多分こう説明してやるはずだ。…さらにまた頭の方にしても、身体全体と切り離して（ἄνευ ὅλου τοῦ σώματοςι）、ただ頭だけ別個に手当てできると思うのは、愚の骨頂だよと。かくてこういう理論に基づいて、いい医者たちは養生法（διαίταις）というものを決めて、身体全体に注意を向け、全身も含めて患者の手当て、治療に関わるわけだ（ἐκ δὴ τούτου τοῦ λόγου διαίταις ἐπὶ πᾶν τὸ σῶμα τρεπόμενοι μετὰ τοῦ ὅλου τὸ μέρος ἐπιχειροῦσιν θεραπεύειν τε καὶ ἰᾶσθαι）。それとも君は気付いていないのかね、そう言うことを彼らが言い、また現に行われているということに。

プラトン『カルミデス』156E4ff.

つまり全体の具合がよくなければ、部分の調子が良いはずはないわけで、全体というものに気をつかわねばならないのに、それをかえりみなかったことが、その原因なのだ（ὅτι τοῦ ὅλου ἀμελοῖεν οὗ δέοι τὴν ἐπιμέλειαν ποιεῖσθαι, οὗ μὴ καλῶς ἔχοντος ἀδύνατον εἴη τὸ μέρος εὖ ἔχειν.）。というのも、彼の説明では、身体や一個の人間全体の善し悪しは全て（τὰ κακὰ καὶ τὰ ἀγαθὰ τῷ σώματι καὶ παντὶ τῷ ἀνθρώπῳ）、魂に始まり、そこから流れ出して来るのだ。

医術の良いあり方が目を向けるものとして、ここで語られているのは、明らかに身体と身体部分の関係であり、さらには人間のあらゆる善悪の流れの大元である魂との関係性である。Tsekourakisはこの『カルミデス』のテキストとの結びつきを踏まえて、ヒッポクラテスのHolismに関して哲学的観点から解釈すべきでないとし、それによって厄介な立場からも解放されると指摘される。彼によれば『パイドロス』の文脈と一致させた宇宙を思索する哲学的なヒッポクラテス理解と、

医学における経験主義とを和解させる必要はないというのである。プラトンは患者の身体全体を診るといういわゆる単純な意味でのHolismをヒッポクラテスに帰しているだけで、言論や宇宙という複雑な文脈とは切り離すべきとするのである。

しかし、この解釈においては、哲学的Holismと医学における「単純な」Holismというシンプルな切り分けによって、ある意味で医術のHolismを過小評価してしまっているのではないか。もちろんプラトンの哲学的方法論はプラトン独自のものであり、すでにヒッポクラテスにおいて同様に語られていたとは思えない。『カルミデス』においても、治療における目や頭といった部位と身体全体との関係の問題であり、それ以上の次元の全体については触れられていない。しかしプラトンは魂の宇宙論的な語りを展開する『パイドロス』という著作においては、Tsekourakisの言うような限定的な仕方でヒッポクラテスが持ち出されているのではなく、以下で見るように『カルミデス』における医術の扱いとは異なったかたちで医学思想とのつながりを意識しつつ語られている。

まず、『パイドロス』冒頭では「医者アクメノスの言葉」に従った散歩という場面描写から始まり（227a2ff.）、医学でも問題となる「狂気」をめぐっての問答と壮大な魂の宇宙論が続く。また、パイドロスの友人であるエリュクシマコスは、『饗宴』でも主要な役割を果たす医者であり、彼の父アクメネスとともに知識を持った医者として後半で登場している（268a8ff.）。これらの主要な場面展開において医術と関連づけ、そして自らの哲学的方法論を説明する重要な場面においてヒッポクラテスを名指しで導入していることからすれば、医術においても身体と宇宙全体という視点を組み込んだHolismを十分にヒッポクラテス思想から読み取っていた可能性がある。（１）に関しては、魂及び身体全体とする解釈をベースとしつつ、宇宙や自然環境という意味での全体理解への広がりを考慮してプラトンによる医術の語りを理解すべきである。アナクサゴラスや初期の自然哲学との関連のみならず、すでに述べたように、ὅλονという言葉を中性形で用いる場合には一般的には、「宇宙」「万有」を意味するものである。そしてヒッポクラテスの言う自然及び環境的な全体は、宇宙全体のことに通じており、そこに指摘されているような意味の隔たりはない。彼ら医学派によれば、身体内の体液の混合状態によって健康と病が判断されるが、それは身体内部の釣り合いでもあり、自然環境との釣り合いでもある。すなわち、医術が身体を扱う際に「宇宙全体」が視野に入っていなければならないとする医学派の教えをプラトンは暗黙のものとして踏まえていたであろう。プラトンにとっては、真なる技術としての基準に適っていたのがそのような全体把握を可能とするヒッポクラテス医術であったのである。

次に（２）の問題に話を移すと、典拠としてのヒッポクラテス文書をめぐる解釈は多様である。Littréをはじめ多くの研究者たちは、プラトンの典拠は『古い医術について』とする。また、ガレノスによれば『人間の自然本性について』、さらに他の解釈者たちによれば『空気・水・場所について』『養生法について』

などの文書が挙げられた。しかしG.Lloydのように『パイドロス』を含めて、その典拠を求め現存する文書を歴史的なヒッポクラテス自身に帰することに懐疑的な立場もある[19]。すでに述べたように、プラトンは医学文書内で推奨された経験的方法論には同意していないし、また歴史上のヒッポクラテス自身へのアプローチにも問題がある点では、Lloydの指摘は十分に踏まえておかねばならない。プラトンの意図は医学文書の正確な理解ではなかったし、魂と言論に関するプラトンの分割と総合の哲学的問答法は直接ヒッポクラテスの方法論とは重ならないという点ももちろん念頭においておかねばならない。そこで、プラトンのテキストの典拠としてではなく、またヒッポクラテスの真作か否かというヒッポクラテス問題として取り上げるのでもなく、現存するヒッポクラテス文書の中に示されているHolismがどのようなものであったかということを、具体的テキストに基づきながら次章で確認したい。

第三章：ヒッポクラテス文書におけるHolism：身体・環境・宇宙

E. Littréによって編纂された70数編のヒッポクラテス文書のうちで、W. H. S. Jones[20]によれば、カノン的文書は『予後』『急性病の養生法について』『流行病』I, III（＋『箴言』『空気・水・場所について』『骨折について』）である[21]。そして『人間の自然本性について』『古い医術について』『神聖病について』『養生法について』など、とりわけ哲学思想との結びつきの強い主要著作においても、カノン的文書に見られる予見や養生法そして体液論の思想に基づいて医学説が語られている。これを踏まえて医学文書におけるHolismを概観するならば、とりわけ主要な哲学的医学文書において（『古い医術について』『空気・水・場所について』『人間の自然性について』『養生法について』）、多層的に語られていることがわかる。以下では基本的に身体の治療的な文脈と環境的な文脈の関係に注目しながらこれら四つの文書におけるHolismのあり方を明らかにする。

A：『古い医術について』（De vetere medicina：VM）

最初期のものとされることの多いこの文書は、医学の方法論の吟味から論述が始まり、仮定（ὑπόθεσις）を立てたこれまでの諸理論は以下の通り批判されている。

> VM c.1（I 570, 1-6L）医術についてこれまで語ったり書いたりしてきた人たちは、それぞれ熱・冷・乾・湿あるいはそのほかの思い思いのものを自分たち自身の論拠の前提にした。彼らは人々の病気や死の原因を簡単にまとめていき、すべてに共通する一つ二つの原理を前提とした。そういう彼らの言い分は多くの点で明らかに間違っているが…

著者によれば抽象的な哲学的思考が批判され、哲学者エンペドクレスが名指しで言及される（VM c.20, I 620, 7ff.L）。エンペドクレスのように還元主義的な一

つの原理を取り出す当時の「新しい医術」に対抗し、食事の摂取やその他の古来からの伝統的な知に基づいた「古い医術」を再興したのがこの著作である。著者が説く「古い医術」の方法論においては「仮定」は何一つ必要でないとされ（I 574, 7L）、経験に基づいた養生法が述べられる（c. 2：I 572, 9L）。そして身体内の構成要素をめぐる病因論（c.13-19）では、さまざまな仕方で対立しあう力を与えられた多数の要因からなる身体において、諸性質がいかによく配合され、混合されているかが問題となっている（c.14）。

VM c.14（I 602, 9ff.L）…というのも、事実、苦いもの、塩辛いもの、甘いもの、酸っぱいもの、渋いもの、水っぽいもの、その他、種類と強度の点で千差万別のものが人体の中にはたくさんあるからである。…すなわちそれらがよく混和し、混ざりけのないものとか強性のものとかを何一つ持つことなく、全一にして単一のものになっているという理由によるのである。

「全一にして単一のもの」としてのよい混合状態は、反エンペドクレス的表現であり、短絡的還元から出発することが批判されている。「熱・冷・乾・湿」は、「他のいかなる形質とも混ざり合うことなく、それ自体として発見されてはいない」からである（c.15：I 604, 15-16L）。

VM c.20（I 622, 4ff.L）…さて、そのように医術を極めてこそ、人間とは一体何であり、どんな原因によって生ずるのか、またその他のことを正確に知ることができる、というのが私の主張である。それはまさにおよそ医者であれば誰もその務めを何らか果たそうと心がける以上、自然について（περὶ φύσιος）次のことをよく知り、また知ろうと懸命に努めなければならないと私には思われるからである。すなわち人間には飲食物に対してどういう関係にあるか、他の習慣に対してはどうか、それらの各々からそれぞれの人にどういうことが結果として生じるかをである。

医者が知るべきなのは、人間が他の様々なものとどのような関係にあるのかについての「人間の自然本性」である。飲食物や習慣について、人間との相関性を述べる際にチーズの例やぶどう酒の例が挙げられる。チーズを過剰に摂取した結果苦しんだことにより、直ちにチーズが有害であると判断すべきではなく、「問題はそれがどんな苦痛を与えるか、何が原因でそうなのか、それは人間の中にあるもののうちの何に合わないのかである」。それゆえ、以下のことについても知る必要がある。

VM c.22（I 626, 6ff.L）人間に生じる症状のどれだけのものが力関係（諸々の体液の作用の鋭さと強さ）から起こり、どれだけのものが形態の関係（人体の中にある限りのものの形状のこと）から起こるか…

VM c.24（I 634, 12ff.L）体液そのものの力について、…それらの各々が人間にどんな作用を及ぼすのか、またそれらは相互にどう関係し合うのか、これを考察して見なければならない…

このような機能と作用を全一的な連関のもとに知ることが、養生法にとって必須のことであり、これは他のヒッポクラテス文書にも随所に確認される典型的なヒッポクラテス的Holismである。

B：『空気・水・場所について』（*De aere, aquis et locis*）Aer.

さらにこのような相関性重視の考察は、同様に比較的初期の『空気・水・場所について』でも同様である。この著作は、特定の地域において気候や風や水などの影響の下にいかなる病が生じるか、固有の風土と人間存在の関わりが見極められる。『流行病』とともに比較的初期の時期の主要な著作として位置づけされている（地域に広がった「流行病」（ἐπιδημίαι）という概念そのものに関しては多くの議論があり、稿を改めたい）。そして、前半部は気候や土地の影響（1-11）、後半ではスキティアなどギリシア周辺地域に住む部族の生活様式について民族学的な視点からの病の考察がなされている（12-24）。

> Aer.c.1（II 12, 1ff.L）医術を正しく探究しようとする人のしなければならないことは、まず一年の各季節がそれぞれどんな影響力を及ぼすかをよく考えてみることである。…次に暖かい風、寒い風、それから特にどの地域の人にも共通の風とか、それぞれの土地特有の風のことがある。水の性質についてもまた考えてみなければならない。…さらに土地のこと、すなわち土地が乾燥していて不毛であるか…さらにまた住民たちの好みの生活様式を…。
>
> Aer.c.2ff.（II 14, 1ff.L）以上に述べたことから、また個々の問題をよく考え合わせる必要がある。というのも、医者が、できればそれら全てを全部と言わないまでも大部分のことをよく知っているなら、未知の町に来たときも、土地特有の病気とどの土地の病気にも共通の病気との見分けに無知であることはなく…。
>
> Aer.c.3ff.（II 14, 20ff.L）まず暖かい風が吹いてくる方向に位置する町。…この町の水は豊富で塩分を含み、…そこに住む人たちの頭は水分が多く粘液性で、その頭から粘液が腹に流れ下りてくるので腹を壊すことが多い。…以上のものがここの住民の風土的な病気である。それ以外に季節が変化したせいで何か流行病が広がれば、それに見舞われることもある。

ここでも同様に、病の発症が相関的であることが具体化されたかたちで述べられ、人間身体のみならず、自然環境全体の相関性に基づいた養生法の必要性が説かれている。

C：『人間の自然本性について』（*De natura hominis*）Nat.Hom.

ガレノスが『パイドロス』と結び付けたのは『人間の自然本性について』である。この著作はガレノス以降の四体液説を準備するようなかたちで四質と四体液との関係が最も明確にされているが、著者はヒッポクラテス自身ではなく、その

弟子であり女婿であるポリュボスによって書かれたとされている。まず、文書冒頭において伝統的な一元論の批判が展開され、エレア派と同様に、一から多が生成することはありえないことが指摘され、熱・冷・乾・湿という人間の持つ複数の諸性質、作用力の存在を認める四体液説がὅλονという言葉とともに語られる。

> Nat.Hom. c.1（VI 32, 1ff.L）人間の自然本性について、医術の領域から遠く隔たった話を聞き慣れている人にとっては、実際のところ、以下の話は聞くに適していない。というのも、私は、人間が空気であるなどとは決して言わないし、同様に火とも水とも土とも、その他、人間の体の中にあっても明白ではないような何かある別のものだとも私は言わないからである。…すなわち存在するものが何か単一のものであり、これが一にして全体であると彼らは主張している。だが、そこにあげられる名称の点では同意していないのである。…
>
> Nat.Hom. c.3-4（VI 38, 7ff.L）人間はただ一つからなっているのではなく、生殖に与った各々のものが自分が提供したような性質を必ず体の中に持っていなくてはならない。さらにまた人間の身体が死に絶えるときは、各々のものは自分の自然本性に、つまり湿なるものは湿に、乾は乾に、熱は熱に、冷は冷に必ず帰っていくのである。…（c.4）ところで、人間の身体は、その中に血液と粘液と黄胆汁と黒胆汁がある。そしてこれらのものが人間の身体の自然本性であり、これらによって病苦に悩んだり健康になったりするのである。いちばん健康であるのは、これらがお互いの混合と性能と量の点で、適切な状態にあり、最もよく混合しているときである。

ここで述べられている熱・冷・乾・湿の四性質と血液・黄胆汁・黒胆汁・粘液の四体液の関係については、それぞれの体液がそれぞれの性質の二対の組み合わせを持つことを基本としている。すなわち血液は＜熱・湿＞の性質と結びつき、黄胆汁は＜熱・乾＞の性質と、黒胆汁は＜冷・乾＞の性質と、粘液は＜冷・湿＞の性質と結びつく。そしてその四つの基本性質が相互に変化して体液のよき混合が保たれることになり、それによって健康が維持されるのである。この四体液説はアトミズム的に諸要素（ストイケイア）の物質的実在性を問うのではなく、その背後にある性質あるいは「力」の方に重きをおいている。すなわち対立する諸性質の作用力に注目し、四体液が相互に力において釣り合いながら周期的循環をなしていることが想定されている。さらにその力の作用は個体の内部構造において成り立っているというだけでなく、たとえば四季によって身体内の調和が変化する場合のように、その個体が他とどのような割合において調和しているのか、すなわち個体内部と外部の「つり合い」も問題としている。それぞれの体液は四つの季節とも関連づけられ、たとえば冷・湿の性質と結びつく冬には、冷・湿の性質を持った粘液（鼻水や唾）を排出する病気が生じるといったように、体液と病気の関係が説明されている（c.7ff.）。身体内の体液の均衡でありながら、同時

に身体外部のさまざまな諸要因との均衡をも包括したもので、「宇宙全体」との関連から見た人間と自然との関わりを示しているのである。このように、ヒッポクラテス文書で語られている体液の混合説の根底には、先の二文書と同様、自然における全体的有機的連関性としての相互作用が成立しているのである。

D：『養生法について』（*De victu*）Vict.

『養生法について』は、ヘラクレイトス哲学を基調とした生理学基礎理論および認識論が展開されている哲学的な文書である。第一巻冒頭の箇所（c.1-2）では、養生法を正しく書き記すのに、まず「人間の自然本性（φύσις）」を知り（VI 468, 7L）、人間が何から構成されているか、全ての飲食物や運動の効力について知らねばならず、全てにおけるその「つり合い」（VI 470, 6L）を知らねばならないと主張されている。

> Vict. I c.2（VI 470, 6ff.L）そればかりでなく運動の、食物量や人間の体質や体の年齢との釣り合い（ξυμμετρίας）や、一年の各季節との釣り合いや、風の変化との釣り合いや、生活を営む地域の状況との釣り合いや、一年の気候との釣り合いもよく知らねばならない。また、星の上昇と下降も知らなければならない。人間に疾病をもたらす食物や飲物や風や全宇宙（τοῦ ὅλου κόσμου）の、変化や過剰に気をつけることができるためである。

気象や天体も含め、昼と夜、月の満ち欠け、夏至と冬至などの全ての事象は（VI 476, 13-4L）、一繋がりのものものとして一方のものが他方のものになり他方のものが一方のものになり、全てが変転しつつある中で、その釣り合いを知るための予見知が医術に必要とされる。

> Vict. I c.5（VI 476, 12ff.L）万物は、神的なものであれ、人間界のものであれ、上へ下へと流れて変転している（χωρεῖ δὲ πάντα）。昼と夜は、片方が最大の極限に到ればもう一方は最小の極限に至る。ちょうど月が、火が入り込んで満月となったり、水が入り込んで新月となったりし、太陽が最長コースをたどったり最短コースをたどったりするように、あらゆるものは同一であるとともに同一ではないのである。

さらに、それに続く箇所（c.12-25）では、技術の模倣説が語られ、人間たちの行為を全体的な関連から見た二つの違った動きとして捉えられる。たとえば靴直し職人が切ったり縫ったりする作業や大工が木を鋸で引いたり押したりする作業は人間の生理作用と対比され、その相互作用は自然のあり方と同様に、全体において一つの釣り合った力の調和として捉えられる。

> Vict. I c.15（VI 490, 5ff.L）靴直し職人は全体を部分ごとに分け、部分を全体にまとめあげる（σκυτέες τὰ ὅλα καὶ τὰ μέρεα διαιρέουσι, καὶ τὰ μέρεα ὅλα ποιέοθσι）。彼らは切ったり縫ったりして、ぼろぼろになった部分を修繕する。人間も同じことを被る。全体は部分に分けられ、部分は結び付けられて全体

となる（ἐκ τῶν ὅλων μέρεα διαιρέεται, καὶ ἐκ τῶν μερέων συντιθεμένων）。ぼろぼろになった部位は医者が切ったり縫ったりすると元に戻る。…自然は自ずからその方法を承知している。座っていると立つことが苦痛となる。動いていると休息するのが苦痛となる。その他の点でも自然は医術と同じである。

このように、技術論で強調された自然の認識は、予見のための基本原理と結びつき、全体的連関から見た力の釣り合いの見極めが必要であるという主張に通じている。栄養消化の説明における火と水の相互作用に関しても、対立的二項はフィードバック機構が働くことによって、変化の過程で「限度を超えず」に変転し続ける。（VI 478, 11/ 480, 16/ 490 , 14 L）。すなわちヘラクレイトス的な「対立の一致」説と同様に、有機体の栄養消化においては、「増大すること」と「減少すること」は「同じ」相即的プロセスのなかで統一されており、全体が有機的連関のもとにあるのである。

以上、解釈者たちがHolismと関連づける主たるA-Dの四著作について具体的なテキストをあげながら概観してきた。これらの記述から分かるように、そこでは養生法と予見及び自然環境の理論に基づきながら、身体全体を他との関係性の中にみるべきことが説かれていた。養生法に基づいたこれらの考察においては飲食物や運動のみならず、身体からの排出状態や、薬剤の効用など、あらゆるものは場合によっても人によっても、異なっており、「関係（相対）的」（πρὸς τί）であるとされている。しかしそれは単なる相対主義に終始するものでは決してなく、高次の関連全体を踏まえて個々の事象を観察することが肝要とされたのである。また、身体の生理学的な部分と全体の関係は、体液の流れのみならず、脈管の循環や臓器の形などの身体の構造や、身体内外への摂取や排出など様々な論点に適用される。そして、円のイメージで身体の全体を捉える文書もHolismを補足するものであり、そこでははじまりと終わりにおける身体の循環が表現され、栄養摂取プロセスも体液の流れとして語られている。

『人体の部位について』Loc.Hom. c.1f.（VI 276, 1ff.L）

私の考えでは、身体には始まりの箇所というものはなく、身体のどの部分もすべて始まりであると同時に終わりである。ちょうど一度描かれてしまった円に始まりが見つからないのと同様である。病気もまた、身体の全ての部分から同じように始まる。…ところで身体そのものはどこも同じ本性を持ち、同じ要素からできているが、同じにできているのではなく、それには小さい部分や大きい部分、下にある部分や上にある部分がある。身体の最も小さい部分でも、それを取り上げて悪くしてみると、どんな疾患であれ、身体全体（πᾶν τὸ σῶμα）がそれを感じとる。…身体の自然性が医術について考える際の出発点である。

『栄養について』Alim. c.23（IX 106, 6-8L）

体液の流れは一つの総体をなし、気息の流れも一つの総体をなしている。す

べては共感しあっている。まとまって全体をなし、個々には各部分がその部分ごとに働きの点でまとまっている。Σύρροια μία, σύμπνοια μία, συμπαθέα πάντα. κατὰ μὲν οὐλομελίην πάντα, κατὰ μέρος δὲ τὰ ἐν ἑκάστῳ μέρει μέρεα πρὸς τὸ ἔργον.

「共にσυν-」という言葉が多様され、内と外、部分と全体、増大と収縮との相互連関において、常なる現象の観察を通じて全体的統一が保証されているという有機的ダイナミズムをここに見ることができる。

以上に見てきた様々な文書内で語られたHolismを、H. Bartošは以下の通り多層的に分類している(22)。

・「治療的Holism」：文書内に柔軟に展開されるHolism。身体の部分が全体と相関的であるとする体液説に見られる。

・「環境的Holism」：こちらも文書内に基本的なもので自然環境の中にある人間存在のあり方。ストア派のσυμπάθεια概念とも結びつく。

・「宇宙的Holism」：文書において稀な語りであり、ミクロコスモスとマクロコスモスの間のアナロジーに基づく視点。宇宙についての特別な知識が必要なのは、神的な予見など。

彼があげた最初の二つは、既に述べたように、様々な文書で基本的な養生法において展開されるHolismである。最後の「宇宙的Holism」に関しては、『七について』、『養生法について』４巻の夢に言及するBartošの分類はやや限定的すぎるのではないだろうか。むしろ「環境的Holism」の延長として読まれるべきで、彼によって特殊なものと位置付けられた箇所についてもこれらと逸脱したものではない。Bartošのように三つに分類するまでもなく、ヒッポクラテス医学のHolismの独自性は、その多層性が一体的な仕方で語られる点にある。身体と環境と宇宙の相関性のもとで、ピュシスを捉えるのが医術のあるべき姿だからである。κόσμοςという言葉は、書簡集を除くと用例は全集内で６文書あり、このうちCDの二文書でともに環境や自然万有と同じ意味で語られている(23)。すなわち身体の治療のためには環境的及び宇宙論的な論点も決して切り離されずそこに結びいていることが確認できよう。

『人間の自然本性について』

Nat.Hom. c. 7（VI 50, 1ff.L）実際、これら四性質のどれ一つといえども、この宇宙にある全てのものがないならば（ἄνευ πάντων τῶν ἐνεόντων ἐν τῷδε τῷ κόσμῳ）、一時たりとも存続はできないであろう。が、逆にこのうちの何か一つが欠けても、全てのものが消失するであろう。それというのも、全てのものが、同じ必然性から成り立っており、相互に養い合っているからである。それと同様に、以上の構成要素のうちの何かが人に欠けるとしても、人は生きていくことができないだろう。

すべてのものが一つにつながり、共感しながら一体的なあり方をしているとい

う見解は、哲学的伝統のもとで、反還元主義や反機械論的な立場としてストア派の哲学においてとりわけ重視されてきたものでもある。そしてSingerによれば、ガレノスはこのようなヒッポクラテスの環境的宇宙的に人間存在を捉えるHolismの視点をより明白に示している(24)。

ガレノス『身体諸部分の用途について』17.1（IV.358, 15ff.K）

宇宙のどの部分（τῶν κόσμου μορίων）が地上の部分よりも価値が低いというのか。ここにおいてさえ、天体から―太陽、月、星、われわれがそれらを観ると、その美しさに直ちに驚嘆するようになるところの天体から、いくつかの知性が届く。ちょうどそれらの天体の実体がより純粋である（καθαρωτέρα）のと同様に、正確に同じ度合いでより善く、より完全な知性（νοῦς）が存在する。汚泥、泥、沼地、腐敗した植物や果物の中に、生き物がそこに発生し、それらを構成する知性の驚嘆すべき現れを提供しているのを見るとき、われわれが思考せねばならぬものは、天体のことなのか。…われわれを取り巻く実際の空気を通してさえ、少なからぬ知性が延長されているように私には思われる（οὐκ ὀλίγος τις ἐκτετάσθαι δοκεῖ νοῦς）。さもなくば、太陽の光線やその力に参与することは本質的に不可能であるだろう。

ガレノスは、理性を通して美しい宇宙を高次に理解することの必要性を説き、宇宙、自然環境、人間をめぐるそのような認識論的および目的論的な観点を、観察に基づいた医学の実践と結び付けている。これはヒッポクラテス医学にすでに調和的に語られたHolismのガレノスによる捉え直しとも言えるであろう。

おわりに

以上、ヒッポクラテスのHolismは、ソクラテス以前の自然哲学、およびその認識論的観点を受容し、人間が自然環境の中で生きることを独自な仕方で医学の語りに受容している。それとともに多様な文脈において語られたὅλον概念は、先に見たプラトン『パイドロス』解釈に見たように、身体のみならず、「宇宙」の意味として示されていたことも確認できた。身体・宇宙・環境、さらには共同体の中で病が考察され、その独自の語りが意味するものは全体を視野においた関係性への配慮であった。そして医学文書の至る所で強調される病の原因探究の難しさは、この全体論と深く結びついている。ヒッポクラテス派の医学思想は経験に基づいた臨床から出発しつつも、全体へと目を向ける限りでそれは認識論的困難さの自覚に立ち返ることでもあり、我々の経験を超えた高次のものへの認識に開かれていくことでもあったからである。病の臨床観察から出発して原因を探し求めること、そしてそこに患者への全人的な理解と献身的医療行為を伴わせることは、ヒッポクラテス医学の説く極めて重要な指針であり、このような医療倫理的観点や究極的な美的観点にも通ずる多様なHolismがその根底にあったと言えよう。

参考文献

Bartoš, H., “Hippocratic Holisms”, In：Thumiger（ed.）, Holism in *Ancient Medicine and Its Reception*, pp.113-132.

Brown, E., “Phaedrus Knowing the Whole：Comments on Gill, ‘Plato’s *Phaedrus* and the Method of Hippocrates’”, *Modern Schoolman* 80（4）, 2003, pp. 315-323.

Ferrari, G. R. F., *Listening to the Cicadas：A Study of Plato's Phaedrus*, Cambridge University Press, 2010.

Galenus, *In Hippocratis de natura hominis commentaria III, In Hippocratis de victu acutorum commentaria IV, De diaeta Hippocratis in morbis acutis*：（Corpus Medicorum Graecorum［CMG］V 9, 1）, 1914.

Gill, M. L., “Plato’s Phaedrus and the Method of Hippocrates”, *Modern Schoolman* 80（4）, 2003, pp. 295-314.

Grmek, M. D., *Diseases in the Ancient Greek World*, John Hopkins University Press, 1983.

Hackforth, R., Plato's *Phaedrus*, Cambridge University Press, 1952.

Hayase, A., “Dialectic in the "Phaedrus"”, *Phronesis*, Vol. 61, No. 2（2016）, pp. 111-141.

Herter, H., “The Problematic Mention of Hippocrates in Plato's "*Phaedrus*"”, *Illinois Classical Studies*, Vol. 1, 1976, pp. 22-42.

Hermias, *Hermiae Alexandrini in Platonis Phaedrum Scholia*, Eds., P. Couvreur & L. Bodin. Paris：É. Bouillon, 1901.

Joly, R., “Notes hippocratiques”, *Revue des Études Anciennes*, 58-3-4, Année 1956, pp. 195-210.

Jouanna, J., “Air, Miasma and Contagion in the Time of Hippocrates and the Survival of Miasmas in Post- Hippocratic Medicine（Rufus of Ephesus, Galen and Palladius）”, In：*Greek Medicine from Hippocrates to Galen：Selected Papers*（Edited with a Preface by P. van der Eijk）, Brill, 2012, pp. 119-136.

King, H., *Hippocrates Now*, Bloomsbury Academic, 2019.

Korobili, G. and Stefou, K., “Plato’s *Charmides* on Philosophy as Holistic Medical Practice”, In：Thumiger（ed.）, *Holism in Ancient Medicine and Its Reception*, pp.201-219

Littré, E., *Oeuvres complètes d'Hippocrate, Traduction nouvelle avec le texte grec en regard*, I-X, Paris, 1851／Adorf M. Hakkert, Amsterdam, 1962.

Lloyd, G.E.R., “Hippocratic Question”, *The Classical Quarterly*, Volume 25, Issue 2, 1975, pp. 171-192.

Lloyd, G. E. R., *In the Grip of Disease：Studies in the Greek Imagination*, Oxford University Press, 2003.

Nutton, V., “Epidemic Disease in a Humoral Environment：From *Airs, Waters and Places* to the Renaissance”, In：Thumiger（ed.）, *Holism in Ancient Medicine and Its Reception*, pp. 357-376

Quine, W. V. O., “Two Dogmas of Empiricism”, *The Philosophical Review*, 60（1）, 1951, pp. 20-43.

Singer, P. N., “Is Graeco-Roman Medicine Holistic？ Galen and Ancient Medical-Philosophical Debates”, In：Thumiger（ed.）, *Holism in Ancient Medicine and Its Reception*, pp. 154-183.

Smith, W. D. “The Genuine Hippocrates and his Theory of Therapy”, in *Aspetti della terapia nelCorpus Hippocraticum：atti del IXe colloque international hippocratique*, Pisa, 25-29 settembre 1996, ed. Ivan Garofalo, et al.（Florence：Olschki, 1999）, pp. 107-118.

Smuts, J. Ch., *Holism and Evolution*, Macmillan and Co., 1927[2].

Thumiger, C.（ed.）, *Holism in Ancient Medicine and Its Reception*, Brill, 2020.

Tsekourakis, D., “Plato’s "Phaedrus" and the Holistic Viewpoint in Hippocrates’ Therapeutics”, *Bulletin of the Institute of Classical Studies*, No. 38, 1991-1993, pp. 162-173 .

de Vries, G. J., “A Note on Plato, "*Phaedrus*" 270 AC”, *Mnemosyne*, 4 th Series, Vol. 35, Fasc. 3／4

1982, pp. 331-333
Verdenius, W. J., “Notes On Plato's *Phaedrus*”, *Mnemosyne* 8（4）, 1955, pp. 265-289.
大槻真一郎編『新訂ヒポクラテス全集』エンタプライズ, 1997.
脇條靖弘訳，プラトン『パイドロス』京都大学学術出版会［西洋古典叢書］, 2018.
藤澤令夫『プラトン『パイドロス』註解』岩波書店, 1984.

（1）本稿は、2022年３月４―５日に開催されたオンライン研究会「ギリシア・ローマ・アラビアにおける医学と哲学のつながり」で発表した内容を改訂したものである。
（2）現代社会においてヒッポクラテス医学に注目すべきなのはその全体論的な視点であるとH. Kingは指摘した（*Hippocrates* Now, Bloomsbury Academic, 2019）。また、2017年９月11-12日にロンドンで開催されたINSTITUTE OF CLASSICAL STUDIES（ICS）のConferenceに基づいてC. Thumiger（ed.）, *Holism in Ancient Medicine and Its Reception*, Brill, 2020が出版され、古代医学文書に多角的に検討が加えられている。彼女によれば、身体経験を説明する際の局所化の傾向は現代において顕著であり、他方非局在化の様態は曖昧で捉え所がなく注目されることが少ない。このことに様々な点で警鐘が鳴らされる。
（3）King（2019）, 159.
（4）Wright（2000）, The tension that King traces between Hippocrates’ significance as a founder of modern biomedicine and a representative of holistic, complementary, and alternative healing practices is a central strength of the book.
（5）Smutsが1926年に初めて使用した言葉である。
（6）多様な文脈で用いられてきた経緯や、科学主義からの批判的な指摘も考慮すべきで、その言葉の使用には慎重であるべきであろうし、現代の補完代替医療としてのホリスティック医療との関係についても慎重に扱うべきものであろう。
（7）Quine（1951）：Duhem-Quine thesis.
（8）プラトン『プロタゴラス』311BC「…アスクレピオス派の医者、コス島のヒッポクラテスのところへ行って、君自身のために報酬として金を払うつもりでいたとする。」…「「自分が何になろうというつもりなのかね」と聞かれたら？」「医者になるつもりなのだ、と答えるでしょう。」
（9）著者および著作名表記はLiddell&Scott, *A Greek-English Lexicon*, Clarendon Pressに基づき、ヒッポクラテスの引用箇所はリトレ（L）の、ガレノスの引用箇所はKühn（K）の巻数、頁数、行数を記した。またプラトンについては岩波全集訳を、ヒッポクラテスについてはエンタプライズ全集訳を使用し、適宜修正を加えた。
（10）Cf. Lloyd（1975）.
（11）Galenus, CMG, V 9, 1（1914）, 55, 16ff.
（12）Hermeias, *Platonis Phaedrum Scholia*（1901）, 245, 5.
（13）Cf. Tsekourakis（1991-1993）, p.163. なお、プラトンのテキストに関してGillはhandoutで次のように分類した。the whole context：contextual（Gill）, the whole world：cosmological（Brown）, the whole（particular）soul, the whole soul（i.e., soul in general）, the whole human being（i.e., complex of the soul and body）：others（undiscussed）. なお、Verdeniusはこの箇所がthe universeへの言及ではなく、魂の全体への言及としたHackforthは正しいとした。
（14）Cf. 続けて弁論術を伝授する際に必要な三つのことを述べている（271Aff.）。第一に魂というものについて、それが本来、一つの相似た性格のものしかないものなのか、それとも体の格好と同じように（κατὰ σώματος μορφὴν）、多くの種類があるものなのかを、できるだけ正確に叙述し教え示すであろう。そして第二に、魂とは本来、何によってどのような作用

を与え、あるいは何からどのような作用を受けるものかということを、書いたり教えたりするだろう。第三には、様々の話し方の種類と魂の種類、並びに、それらの様々な反応の仕方を分類整理した上で、その原因を詳しく論じるだろう。

（15）しかし宇宙全体の本性をみることが、魂の種類をみることとのつながりについての説明が見られないゆえ、近年の多くの研究者たちはこの立場を取らない。

（16）the whole environment, the whole context（Gill）/the overall system（Ferrari）

（17）Cf. Gill（2003）, 304；Brown（2003）, 319；The overall system：Ferrari（1987）76, 241n.17；Wellmann, Nestle, Diller.

（18）レトリックにおいては、全体は宇宙、部分は魂、を意味するが、医学においては、人間身体とその部分と理解されているが、これは不十分である。

（19）Cf. Lloyd（1975）.

（20）*Hippocrates* I, Loeb Classical Series, p.xvi

（21）基調にあるのは、πρόγνωσις（予後、予見）、κατάστασις（気候状況とそれに基づく疾病の特性）、φύσις（自然本性）、κρίσις（分利）、ἀπόστασις（膿瘍形成、転移）、δίαιτα, διαίτημα（養生法、食事法）の六点であるとされている。

（22）Bartoš（2020）, pp. 113ff.

（23）「全宇宙」（Vict1.2：τοῦ ὅλου κόσμου）「この宇宙」について話すとき精巧な宇宙モデルを念頭に置いておらずに、環境だけについて話すとしてあくまで区分している点はBartošに同意しがたい。

（24）Singer（2020）, pp. 176ff.